羅振玉と内藤湖南の書学交流

── 碑学研究と王羲之研究を例として ──

石　永　峰

Luo Zhenyu and Naitō Konan's Exchange of Opinions on the Study of Calligraphy Study: Their Perspectives on Stele and Wang Xizhi Studies

SHI Yongfeng

Luo Zhenyu, a leading scholar of the Late Qing-Early Republic of China periods, became prominent because of his rich collections and publications, his deep insights, and his extensive knowledge of scholarship and the arts. Luo was also renowned for his long stay in Japan and his close associations with native scholars and literati. Naitō Konan, Luo's Japanese friend, was a representative sinologist of modern Japan. Along with Kano Naoki and Kuwabara Jitsuzō, Naitō founded the Kyoto School of Sinology on the strength of his experience in journalism and his subsequent work as a professor of oriental studies at Kyoto Imperial University.

Fujida Toyohachi introduced Luo Zhenyu to Naitō Konan in 1899. The duo then began to exchange opinions with Naitō Konan on rubbing books and Wang Xizhi's copybooks. Luo Zhenyu and Naitō Konan remained closely associated in several domains including calligraphical studies over the next few decades. Further, both scholars enhanced their knowledge and insights by sharing information for many years on subjects such as the study of steles and Wang Xizhi. They were thus able to develop individual perspectives on calligraphy. Luo Zhenyu and Naitō Konan acquired deep insights into, and comprehensive knowledge of calligraphy, publishing articles in the form of prefaces and postscripts on the subject. Their work has attracted insufficient scholarly attention despite their significant contribution

This paper, based on a previous research project, focuses on Luo Zhenyu and Naitō Konan's study of steles and Wang Xizhi, using their prefaces and postscripts; the correspondence between them that was collected in their *Complete Works* (Luo

Xuetang xiansheng quanji and Naitō Konan zenshū; and the archives preserved in Naitō Bunko of the Kansai University library. In so doing, the paper prosposes to elucidate their exchanges on calligraphy and to determine their influence on each other.

キーワード：羅振玉（Luo Zhenyu）、内藤湖南（Naitō Konan）、書学交流（Calligraphy Study Exchange）、碑学研究（Stele Studies）、王羲之研究（Wang Xizhi Studies）

1　はじめに

羅振玉（1866～1940）は清末民国初期を代表する学者であり、浩瀚な著書と豊富な収蔵によって学問と芸術における造詣が深く、また日本に長く滞在し、多くの日本の学者、文人等と交流した[1)]。羅振玉の友人である内藤湖南（1866～1934）は近代日本を代表する漢学者の一人であり、新聞記者を経て、京都帝国大学の東洋史学担当の教授として、狩野直喜・桑原隲蔵らとともに中国学における「京都学派」の基礎を築いた人物である。羅振玉と内藤湖南は1899年に藤田豊八の紹介によって知り合い[2)]、碑学に関する拓本と王羲之の法帖の話題に始まり、その後の数十年間にわたり、書学を含めて両者は多くの学問分野において密接な交流を持った。また、両者は長年にわたりお互いに資料を提供しあって、碑学研究と王羲之研究等の方面においてともに研鑽を深め、各自の書法観を形成した。

羅振玉と内藤湖南は、書学の方面でもともに造詣が深いが、まとまった論文は少ない。しかし、書学研究に関する論述は両者が書き残した題跋などに多く含まれるが、それらに関連する研究はまだ不十分である。本論文は関連の先行研究[3)]を踏まえ、羅振玉と内藤湖南に関する文

1）夢郼居士著、蕭立文整理「雪堂紀年」、羅振玉「雪堂自書履歴」、羅振玉著・張本義主編『羅雪堂合集』第六函第2冊所収（西泠印社出版社、2005年）。

2）莫栄宗「羅雪堂先生年譜一卷」、『羅雪堂先生全集』初編第二十冊、大通書局、1968年、第8711頁。

3）羅振玉と内藤湖南の書学交流に関する先行研究について、まず杉村邦彦氏は「羅振玉における“文字之福”と“文字之厄”－京都客寓時代の学問・生活・交友・書法を中心として－」（書学書道史学会編著『国際書学研究／2000：第4回国際書学研究大会記念論文集』、萱原書房、2000年）において、羅振玉の蔵品は内藤湖南などの紹介により原田博文堂を通して関西の財界の有力者に売却されたと考察した。当時日本へ流入した中国の書画・碑帖などには、内藤湖南と羅振玉が書いた題跋や題簽が多く、その中からも羅振玉と内藤湖南の書学交流を窺うことができると指摘した。また、杉村邦彦氏は「羅振玉の日本における研究生活とその交友関係」（杉村邦彦『書学叢考』、研文出版、2009年）において羅振玉と内藤湖南は長年の交流を通して学術研究の資料や情報を相互に交換しあうとともに、書画の題跋の揮毫などを通して、研究面でも相互に啓発し、協力しあっていたと指摘した。また羅振玉が京都に寄寓した期間において内藤湖南とともに京都大正蘭亭会、寿蘇会、楊守敬追悼会に参加　↗

献資料（『羅雪堂先生全集』『内藤湖南全集』、博文堂刊行の関連碑帖資料など）に所収の題跋、書簡、及び関西大学図書館内藤文庫の資料などを利用して、碑学研究と王羲之研究に焦点を絞り、両者の書学研究の交流と相互の影響関係について考察したい。

2　羅振玉と内藤湖南の早期における書学交流

(1) 羅振玉と内藤湖南の共通点

羅振玉は内藤湖南と同年生まれだけではなく、多くの共通点がある。具体的には教育上の背景、職業キャリア、研究分野、生活経歴などの面からその共通点を見ていきたい。

まず第一に、羅振玉と内藤湖南とはいずれも幼少期に家学の影響を受け、伝統的な漢学の教育を受け、青年期においてすでに十分な詩文の創作能力を備えていた。

↘し、書学に関することも多く交流していたと考察した。次に、陶徳民氏は「序説：大正二年における内藤湖南・藤沢南岳の「王右軍」論の含意を考える－本書の狙いと構成の紹介を兼ねて－」（陶徳民編『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承－関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に－』、関西大学出版部、2013年）において、内藤湖南の「南帖北碑論」は1913年から1932年までの二十年間において変化が生じたことを指摘し、その背後にある理由として晩年まで湖南は多くの「金石書画や出土文物に幅広く目を配った結果」だと論じた。また、この研究の補論（陶徳民「関西における「王右軍」論の展開と湖南の「南帖北碑」関係論の変遷」、陶徳民『もう一つの内藤湖南像－関西大学内藤文庫探索二十年』、関西大学出版部、2021年3月。）として、湖南の論調の変化は羅振玉「隋丁道護書啓法寺碑跋」や王国維「梁虞思美造象跋」から影響を受けたとしている。さらに陶徳民氏は羅振玉所蔵『隋丁道護書啓法寺碑』が日中両国間の流伝出版の経緯を明らかにし、1924年に博文堂より出版した12年前にも内藤湖南は羅振玉、大西行礼、博文堂主人と密接な信頼関係を構築できたことを論じた（陶徳民「拓本啓法寺碑在中日兩國間的流轉出版及其影響－兼論内藤湖南對羅振玉的阮元批判所作的響應－」、関西中国書画コレクション研究会編『関西中国書画コレクション研究会設立10周年記念　国際シンポジウム報告書「中国書画コレクションの時空」』関西中国書画コレクション研究会、2022年3月）。さらに、菅野智明氏は内藤湖南による「温泉銘」解説文の考察（菅野智明「内藤湖南對敦煌拓本《温泉銘》之所見－兼論内藤的交友及王羲之書法觀」、『饒宗頤教授百歳華誕國際學術研討會會議論文集』3、2015年12月）を通して、羅振玉が敦煌新発見文書の写真資料を湖南に送った事実を紹介し、湖南による「温泉銘」解説文が彼の早期王羲之観が形成した重要な契機であると論じた。また、菅野智明氏は「博文堂における中国法書の影印出版について」（『中国近現代文化研究』第16号、2015年）において、博文堂の影印出版において内藤湖南と羅振玉は協力体制で顧問役をし、両者の出版をめぐる意識の差異を考察した。博文堂の出版事業に対する影響として、内藤湖南は初期において日本の古法継承を重視し、羅振玉参画後に王羲之礼賛へ転換したことも指摘した。そのほか、下記の先行研究もある。銭鴎「羅振玉・王国維と明治日本学界との出会い－『農学報』・東文学社時代をめぐって－」、『中国文学報』京都大学文学部中国語学中国文学研究室、1997年。龔鵬程「羅振玉的書学與書藝」、『詩書画』、詩書画雑誌社、2013年。張明傑「京都寄寓時代の羅振玉の書学関連活動」、陶徳民・中谷伸生編著『山本竟山の書と学問－湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク』、関西大学東西学術研究所、2019年。

第二に、当時新たに興隆した「新聞」との縁が深く、「操觚者」としての経験を共有していた。明治二十年（1887）、22 歳の湖南は北秋田郡綴子小学校訓導を辞職し、上京して『明教新誌』の記者となり、その後『萬報一覧』『大同新報』『三河新聞』『日本人』『亜細亜』『大阪朝日新聞』の記者、編集、そして主筆を務めた[4)]。一方、羅振玉は西洋の近代的な農業を学ぶため、光緒二十二年（1896）には蔣黼とともに上海に学農社を創設し、欧米や日本の農書を翻訳出版するとともに、「農学報」を創刊した[5)]。

第三に、両者の関心事、志向及び研究分野の共通点が多い。両者はそれぞれの専門とする分野を持ちながら、いずれも訓詁文字学、校勘学、版本目録学、金石書画、甲骨学、敦煌学、収蔵鑑定などの学問分野において資料を渉猟し、もしくは顕著な研究業績を残した。また、両者の書簡には、上記の学問分野のほかに中国の歴史文化、訪書蔵書、日中文化交流などの話題がしばしば取り上げられており、双方の関心事も同じであることが分かる。

第四に、二十代の羅振玉と内藤湖南は、それぞれ中国と日本において俊才でありながら、両者の履歴から見ればいずれも「ノンキャリア組」であった。即ち、羅振玉は官僚登用制度の科挙試験を通して出世しておらず、青年時代の内藤湖南も秋田師範学校を卒業後、小学校の訓導から新聞記者となったが、帝国大学の文科大学へ進学することもなかった。しかし、両者とも既存の旧制度に縛られることなく、学問的関心を出発点として長年にわたる研鑽により、それぞれの学問を大成し、多くの著述を残した。その点でも、両者は共通すると言えよう。

最後に五点目として、両者は京都で文人生活を送ったという共通の経歴を持っていることが挙げられる。1911 年、羅振玉は内藤湖南、狩野君山、富岡桃華等の熱心な勧誘によって家族（姻戚の王氏・劉氏ら二十余人）を率いて京都へ移住したことは周知のことであろう。その後、羅振玉は京都に寄寓した八年間、内藤湖南とともに大正癸丑蘭亭会、和漢法書展覧会、清朝書画展、寿蘇会などの文人交流の活動[6)]に参加したのみならず、所蔵の書画作品を鑑賞や研究の

4）「内藤湖南年譜」、『内藤湖南全集』第十四巻、筑摩書房、1976 年、659-669 頁。

5）羅琨、張永山『羅振玉評伝』百花洲文芸出版社、1996 年、20-30 頁。銭鴎「羅振玉・王国維と明治日本学界との出会い――『農学報』・東文学社時代をめぐって」、『中国文学報』第 55 冊、京都大学文学部中国語学中国文学研究室、1997 年、84-126 頁。

6）その時期に開催された文人交流活動に関する近年の論文集と図録を次の通り列挙する。陶徳民編『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承－関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に－』、関西大学出版部、2013 年。関西大学大正癸丑蘭亭会百周年記念行事実行委員会、関西大学アジア文化研究センター編集『大正癸丑蘭亭会百周年（おおさか）記念－近代日本における翰墨の盛典』、関西大学大正癸丑蘭亭会百周年記念行事実行委員会、2013。藪田貫・陶徳民編著『泊園書院と大正蘭亭会百周年』、関西大学出版部、2015 年。陶徳民・中谷伸生編著『山本竟山の書と学問－湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク』、関西大学東西学術研究所、2019 年。関西大学「山本竟山の書と学問」展 ↗

ために提供し、一部は影印出版された。

(2) 上海での初対面―「訂交於滬江」―

羅振玉が内藤湖南と初めて出会ったのは1899年に上海にいたときのことであり、藤田豊八の紹介によって知り合ったのである。このことについて羅振玉は内藤湖南編『満洲写真帖』の序文に

> 光緒中葉、吾友湖南博士肇遊禹域、以藤田剣峰博士為之介、爰訂交於滬江。傾蓋談芸、歓若平生、因偕遊会稽、探禹穴、浮海至四明、訪万季野、全謝山先生故里、登天一閣、観範氏蔵書、臨岐遅回、不忍去。復南渡漢水、北至燕京。既帰遺書道遊観所得、且謂此行不獲出山海関、一覧明季戰壘與有清興王之迹、以証史事、美猶有憾、期償諸異日。[7)]

と述べている。すなわち、1899年に湖南が初めて訪中した際、羅振玉は湖南に上海、寧波、武漢、北京まで案内し、両者は「談芸」「訪書」などの共通の関心事を通して、意気投合するようになった。その交流内容について、湖南の旅行記『燕山楚水』の記載がもっとも詳しく、その一部を次の通り引用してみよう。

> 漢口より帰りて、上海に留まること、僅かに四日なりしが、此間に羅叔韞振玉と金石を評論し、張菊生元済、劉氏学詢と時務を論ぜしは、掉尾の佳興なりき……
>
> 羅叔韞との談は、多く金石拓本を披きて、此れ一句、彼れ一句、相応酬したれば、零砕にして録し難きこと多し、羅はその著たる『面城精舎雑文甲乙篇』、『読碑小箋』、『存拙斎札疏』、『眼学偶得』を贈られ、吾は『近世文学史論』を以て之に報じ。吾は携へ来し、「延暦勅定印ある右軍草書」、「法隆寺金堂釈迦佛」、及び「薬師佛光焔背銘」、「二天造像記」、「薬師寺塔檫銘」、「佛足石讃碑」、「神護寺鐘銘」諸拓本、「風信状」、「小野道風国字帖」等を贈り、羅は「秦瓦量」、「漢戴母墓画像」、「漢周公輔成王画像」、「北斉張氏白玉象」、「唐張希古墓誌」、及び「高延福墓誌」、「南漢馬氏買地券」、「晋永康甎」、及び「無年号甎」、「宋元嘉甎」等の拓本を以て之に報じたり、蓋し此等諸本は、文字尽く精善なるに

↘示会実行委員会・関西大学博物館『山本竟山の書と学問－湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク』、関西大学博物館、2018年。

7）羅振玉「満洲写真帖序」、内藤湖南編『満洲写真帖』増補版所収（小林写眞製版所出版部、1935年）。

非ざるも、皆人家に蔵弆して、市肆間の購求すべき者に非ず……[8)]

とある。すなわち、その時の訪中において湖南は多くの友人ができ、羅振玉との対談は金石書法を主要な話題としていた。単に書学に関する交流が行われるだけにとどまらず、二人はお互いに著作や拓本を交換した。両者による書学交流の初期において湖南が寄贈を受けた羅振玉の著書として、下記の現物資料が関西大学図書館内藤文庫に所蔵されている。

a. 羅振玉『存拙斎札疏』（1884 年）〔19 歳。金石文条目を考証した文集。〕
b. 羅振玉『読碑小箋』（1884 年）〔19 歳。金石碑版に関する文字を考証した文集。〕
c. 羅振玉『眼学偶得』（1891 年）〔26 歳。金石文字を校勘した文集。〕
d. 羅振玉『面城精舎雑文甲篇』（1891 年）〔26 歳。考証、論述、序跋文。〕
e. 羅振玉『面城精舎雑文乙篇』（1895 年）〔30 歳。同上。〕
f. 羅振玉『再続寰宇訪碑録』（1893 年）〔28 歳。孫星衍・邢澍『寰宇訪碑録』、趙之謙『補寰宇訪碑録』を校勘し、碑録二千通を補った。〕

湖南は羅振玉から贈られた著書を大切に収蔵しており、特に下記の書籍の表紙には書入れを明記したものもある。いずれも本の扉に「藤虎、字炳卿」を押印している。例えば、

・『存拙斎札疏』：注記「己亥十一月念三在滬上日羅堅白君贈、炳卿」

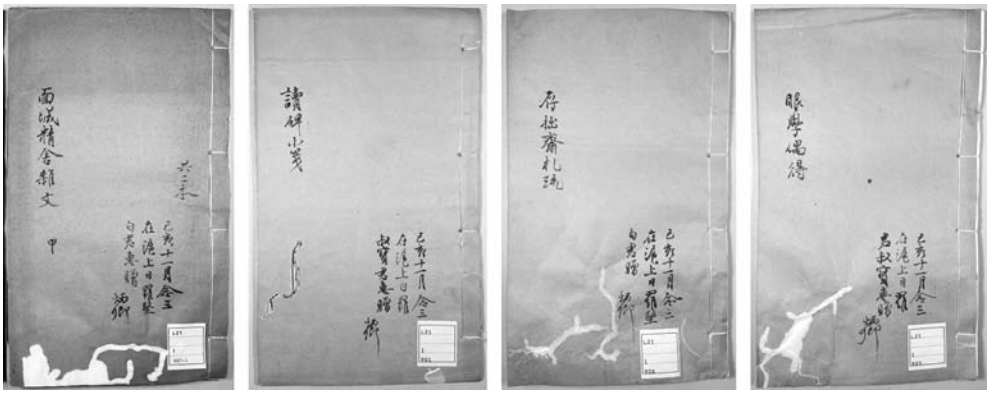

図 1　羅振玉著『面城精舎雑文』などへの内藤湖南による書き入れ

8）内藤湖南「禹域鴻爪記」、『燕山楚水』博文館、1900 年、『内藤湖南全集』第 2 巻、筑摩書房、1971 年、101-106 頁。

・『読碑小箋』：注記「己亥十一月念三在滬上日羅叔宝君恵贈、炳卿」
・『面城精舎雑文甲篇』：注記「己亥十一月念三在滬上日羅堅白君贈、炳卿」
・『眼学偶得』：注記「己亥十一月念三在滬上日羅叔宝恵贈、炳卿」

一方、『再続寰宇訪碑録』には羅振玉の筆跡「著者呈内藤湖南先生」が確認できる。これらの羅振玉の著書に湖南の朱筆による注記や評語が残されていることからも、同じ年の羅振玉の著書に刺激され、湖南は羅振玉の学問方法や金石研究などに影響されていたに違いないであろう。内藤湖南の『支那史学史』において「清朝の史学」の一章に「金石の学」という講義内容が収められており、羅振玉の著書およびその史学史における系統関係を言及している。すなわち、畢沅の幕僚である孫星衍は邢澍とともに八千余りの石碑の碑名、地方、年代、書者などの項目を分けて記録し、石碑の目録として『寰宇訪碑録』を作った。その後、趙之謙は『補寰宇訪碑録』、羅振玉は『再続寰宇訪碑録』を続編として編輯した[9]と紹介している。

(3) 内藤湖南の「羅振玉宛の未発送書簡」(1901 年 3 月)

湖南が帰国後から第二回訪中の 1902 年 10 月までの間、湖南と羅振玉との間には書簡を通した交流が続いていた。それは羅振玉の長孫羅継祖[10]によって紹介された一通の未発送書簡から窺うことができる。その書簡はもともと吉川幸次郎が所蔵していたもので、1942 年から羅継祖が京都大学で文学部講師として務めた際に目睹したのである。書簡に記された日付は明治三十四年（1901）三月廿八日であり、羅振玉と内藤湖南の初期の交友を反映する重要な資料となる。湖南は書簡の中で

叔韞先生足下：

上年賜書及石本古墨数種、自安村君転交、謹拜嘉貺。宜即鳴謝、意欲獲一珍奇而後答盛意……上年七月後移居大阪、在朝日新聞館、不能専心物色、匆匆已過一年、為罪至深。頃乃訪得『集古十種』内「鍾銘記」足本、因友人西村天囚君赴滬、托以転呈……[11]

9）内藤湖南「支那史学史」（第十二章「清朝の史学」、第十七節「金石の学」）、『内藤湖南全集』第 11 巻、筑摩書房、1969 年、421 頁。

10）羅継祖（1913～2002）、歴史学者、教育者であり、著作は『遼史校勘記』『遼史表訂補』『楓窗三録』などがある。羅振玉の長孫で、1913 年に京都に生まれた。

11）羅継祖「内藤虎次郎致羅振玉一封未發的信」、羅継祖『我的祖父羅振玉』百花文藝出版社、2007 年、224 頁。

と述べている。これによると、1899年に羅振玉と湖南が会ってから一年以内に、羅振玉はまた書籍や拓本数種を湖南に寄贈した。湖南はそれに感謝するため、先ごろ『集古十種』のうちの「鍾銘記」足本を入手したので、友人の西村天囚が上海へ行くのに托して謹呈したいという。

湖南は書籍及び学問情報を交換するほか、読書の心得などについても書簡中に以下のように述べている。

> 近読包慎伯論書、頗有省焉。敝邦書家伝有僧空海筆法、空海唐時渡海、受筆法于韓方明、有『執筆法』一卷、至今臨池之家、奉為圭臬、而其所言與安呉氏相近、仆是以信安呉氏之説也。『暦下筆譚』評論古今、亦皆洞窺、仆甚愛誦。不自量力、竊欲為撰箋注、参以海師以下敝邦名家筆法、並評論敝邦書法逓嬗之故、以伝于同好。但『筆譚』所論百碑拓本、非摹其真而証之于実、則観者不得了了。而仆蔵弆極匱、別記碑目現皆無蔵本、若蒙足下代為物色、付西村君、若木根館滬上采訪員牧放浪君転恵、則仆喜曷如……[12)]

すなわち湖南は包世臣の書論を愛読し、その書論には空海の書論に近い部分がある。そこで、空海以降の日本書家の筆法論を交えて『暦下筆譚』の箋注を執筆したいとと思い立ったのだが、しかし書中に見える多くの石碑拓本を持っていないため、羅振玉に探してもらいたいという依頼の内容である。

羅継祖によると、『集古十種』は届いたようであるが、この書簡は発送し忘れた可能性がある。いずれにしても、湖南は帰国した後も羅振玉と文通を交わし、しかも碑学、帖学などを含めた幅広い書学に関する交流を行っていたことが分かる。

この書簡は湖南と羅振玉との交流の中でも早期のものであるが、『内藤湖南全集』所収の複数の羅振玉宛の書簡においても、書籍（羅振玉の著書も含む）や拓本などの書学資料を交換し、また買い求める内容が多く見られる。

3　碑学研究―南朝碑と墓誌銘の尊重―

羅振玉は少年時代から孫星衍・邢澍の『寰宇訪碑録』、趙之謙の『補寰宇訪碑録』を読み、金石学と碑学に関する知識を深めていた。1882年、17歳の羅振玉はある人から珍しい拓本を購入し、孫・趙二著と照合したところ、著録されていないことが分かった。羅振玉はその時か

12）羅継祖「内藤虎次郎致羅振玉一封未発的信」、羅継祖『我的祖父羅振玉』百花文藝出版社、2007年、225頁。

ら読書すると同時に石碑拓本を集め、孫・趙二著を補うような著書をまとめたいと期していた。19歳の時に、金石文条目を考証した『存拙斎札疏』、金石碑版に関する文字を考証した『読碑小箋』をまとめた。したがって、羅振玉は青少年期から金石学と碑学に関して、既に研究の初期段階に入っていたと言える。

すでに触れたように、1899年に羅振玉は湖南に初めて会った時、金石学に関する自著四種を贈り、同い年の湖南は大いに刺激を受けたに違いない。碑学研究において、湖南は羅振玉から資料の提供を受けるのみでなく、書学観においても大いに影響を受け、また共有している。例をあげれば、湖南の有名な講演「書論の変遷について」の中で、少なくとも「阮元「南北書派論・北碑南帖論」に対する批判」「南碑の重視」「墓誌銘の重視」などの論点において羅振玉と同趣の見解が確認できる。

(1) 阮元「南北書派論・北碑南帖論」に対する批判

阮元「南北書派論・北碑南帖論」について、内藤湖南は羅振玉とともに批判する立場にあった。内藤湖南は阮元の「王羲之の楷書行書は当時一般に通行していなかった」という論に対して、新しく発掘された李柏文書を用いて反駁した。李柏文書とは敦煌で発見された東晋時代の紙本墨書の断簡であり、早期敦煌学研究における重要な研究成果であることは言うまでもない。その研究成果はまさに内藤湖南と羅振玉、もしくは両者をはじめとする研究チームの協力によって1910年代にあげられたものでもある[13)]。1911年3月26日に内藤湖南は『大阪朝日新聞』上に「北派の書論」を発表した。阮元の「南北書派論・北碑南帖論」に対して次のように述べた。

---

13) 内藤湖南と羅振玉における早期敦煌学の情報交換について、例を挙げれば、1909年11月に羅振玉はペリオの敦煌古書発見のことを内藤湖南と狩野直喜に知らせ、同時に敦煌文書の写真が送られ、内藤湖南の主導により京都大学文科大学の史学研究会にて発表し、京都府立図書館で「敦煌文書写真展」が開催された。1910年3月26日付狩野君山あて内藤湖南の書簡に、「西本願寺発掘の西域文書は実物到着以前に已にその年代の考証は出来申候、これは羽田学士の発見にて、前涼の張駿傅に見えたる西域長史李柏の文書に候、多分鄯善王に与へたるものと存候、王羲之と同時にて少し早い位、故書法の方からも面白かるべく大に待こがれ居候。」(『内藤湖南全集』第14巻、468頁)と見える。また、1910年5月15日付狩野君山あて内藤湖南の書簡によると、西域長史李柏の文書を含む西本願寺資料が京都に到着し、その整理と研究が内藤湖南に任されていた(『内藤湖南全集』第14巻、472頁)。湖南はそれらの資料を羅振玉と王国維に提供し、『流沙墜簡』も一部の資料として利用された。これによって、書写年代については、328〜330(咸和三〜五年)とする説(羽田亨説)と、345(永和元年)以後とする説(王国維説)とに大別される。

殊に阮元の考へとして、王羲之の当時には、後世の法帖などに伝へて居るやうな二王の正書行書と云ふものは、一般に通行して居なかったかの如く疑つて居るなどは、甚だしき間違である。近年に至つては、西洋人並に西本願寺探検隊などの中央亜細亜発掘に依つて、西晋頃の書が現れて来る。それによつて見ると、隷書と同時に正書行書も行はれて居つた形跡が明かで……是等は単に北碑に依つて議論を立てた阮元の主張の確に敗るべき点であって、南北書派論などと云ふものが殆ど何の意味もなさぬことになる。[14]

とある。すなわち、阮元は王羲之の楷書と行書が東晋時代に一般の書体として通行しなかったと論じた。それに対して湖南は20世紀初頭にスヴェン・ヘディン、オーレル・スタインや大谷光瑞などの敦煌発掘調査によって、それまでに発見されていない西晋頃の墨書が出土し、それによって隷書と楷書行書が同時に通用していたことが証明されたと説き、「北碑南帖論」を反駁した。

また、1932年に平安書道会の講演の中において、内藤湖南は阮元「南北書派論」を再度取り上げ、次のように述べている。

この人（阮元）の議論の仕方には無理があることも免れませぬ。今日では私どもには決して北派の書でないと思はれるものでも、無理に北派の書の中にたゝき込んで議論をして居るのもあります。例へば近年日本に有名な拓本が参りまして、日本で版にもなりました丁道護の啓法寺の碑といふやうなもの、それから有名な褚遂良の書といふものも、北派の中に押込んであります。……ともかく丁道護といふものを北派の中にたゝき込んであるのです。褚遂良の書といふものは、それは北派の書に類したものも多くあって、この人は所謂北派の書も南派の書も両方書いたらしいのでありますから、どっちへ引付けて引付けられぬことはないのでありますが、阮元といふ人はともかくそれを北派の方へ皆引込んでしまつて居るのです。さういふやうな点がありまして、この議論を読むのには、餘程気を付けて読まなければなりませぬ。[15]

とある。すなわち、内藤湖南は阮元が隋の「丁道護書啓法寺碑」や褚遂良の書を北派の書とし

14）内藤湖南「北派の書論」、『大阪朝日新聞』、1911年、3月26日、『内藤湖南全集』第8巻、筑摩書房、1969年、49-50頁。

15）内藤湖南「書論の変遷について」、昭和7年講演、昭和23年1月および四月発行「東光」第3号第4号所載、『内藤湖南全集』第8巻、筑摩書房、1969年、57頁。

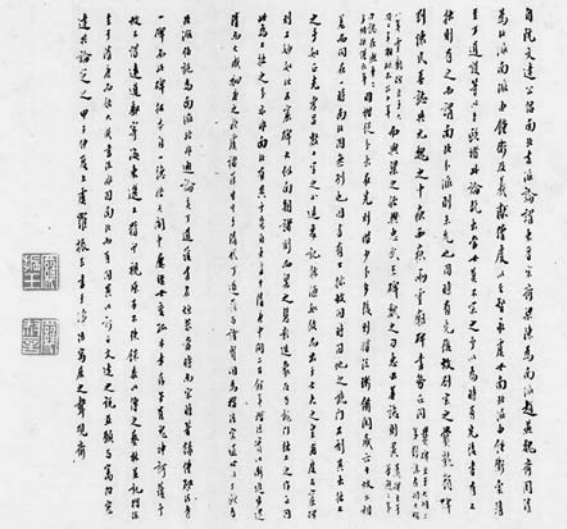

図２　羅振玉「隋丁道護書啓法寺碑跋」

て位置づけたことに対して異議を唱えたのである。「日本で版にもなりました丁道護の啓法寺の碑」とは 1924 年に博文堂より刊行した『啓法寺碑銘』ことを指している[16]。

羅振玉は『啓法寺碑銘』の末尾に「隋丁道護書啓法寺碑跋」をしたためており、その一節を以下の通り引用してみよう。

> 自阮文達公倡南北書派論、謂東晋宋斉梁陳為南派、趙燕魏斉周隋為北派。南派由鍾衛及羲献僧虔、以至智永虞世南、北派由鍾衛索靖及丁道護等、以至欧褚。此論既出、当世莫不宗之。予以為時有先後、書有工拙則有之。而謂南北分派、則未允也。[17]

とある。羅振玉は阮元の「南北書派論」を紹介した後、自分の意見について「予以為へらく時

16）「啓法寺碑」は隋の仁寿二年（602）襄州（湖北省襄阳）の啓法寺に建てられたが、南宋ごろに亡佚した。「啓法寺碑」の孤本が日本に伝来した経緯について、杉村邦彦は「清朝の康熙年間には何焯が愛蔵し、その後久しく呉中に伝わっていたが、おそらく嘉慶年間に臨川の李宗瀚の収蔵に帰し、「李氏四宝」の一つに数えられることになった。その後羅振玉によってわが国にもたらされ、大西潤甫氏の有に帰し、重要文化財に指定されている」と紹介した。杉村邦彦「啓法寺碑丁道護」、杉村邦彦『書学論纂』知泉書館、2018 年、213-214 頁。

17）羅振玉の「隋丁道護書啓法寺碑跋」、『羅雪堂先生全集』七編第三冊、大通書局、1976 年、1243～1244 頁。図２　羅振玉「隋丁道護書啓法寺碑跋」陶徳民氏が購入した『隋丁道護書啓法寺碑』（博文堂、1924 年。関西大学図書館所蔵）の末尾に収録されている。

に先後有りて、書に工拙有れば、則ち之有り、而るに南北派を分かつと謂うは、則ち未だ允（いん）ならざるなり」と明言した。つまり、先に引用した湖南の講演における発言は羅跋の「書の歴史の前後順序があり、書は工拙があるが、南北派を別れる説は賛成できない」という論説を踏まえたものであると考えられる。

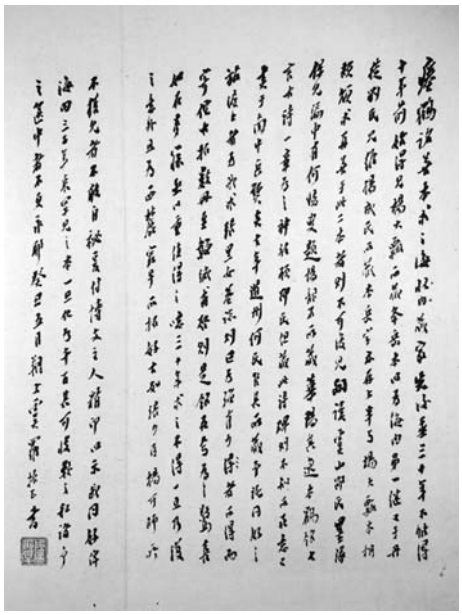

図３　羅振玉「明水拓鶴銘跋」（1913 年）

（2）南朝碑の尊重

湖南は南朝碑に関して、阮元の二大書論が重要な新紀元となるものであり、楊守敬が来日前に著した「評碑記・評帖記」に南朝碑を多く論じたことを「一種の覚醒が来た」と高く評価している。同時に羅振玉が提供した『瘞鶴銘』[18]など多くの資料を論拠として活用している。

南朝碑の研究史について、包世臣が初めて代表的な南朝碑である「始興忠武王碑」に注意し、その後康有為が『広芸舟双楫』で本格的に「南朝碑」のことを議論し始めた。康有為は「始興忠武王碑といふものは南碑の中で結構なものであるが、しかし北碑の方の張猛龍の碑があれば始興忠武王碑がなくても我慢が出来る、かう云ふのであります。それから今の瘞鶴銘です。これは南碑の結構なものであるが、しかし北碑には石門銘といふものがあつて、それがあればこの瘞鶴銘がなくても我慢が出来る」[19]という北碑を尊ぶ姿勢を示していた。

湖南は「書論の変遷について」という講演において、羅振玉の跋文と呼応するように、『瘞鶴銘』の由来や書論史上における重要な位置づけなどを説明している。同時に、『瘞鶴銘』は『石門銘』と並ぶ碑学史の系統における重要な石碑であり、康有為の「石門銘があれば瘞鶴銘

18）『瘞鶴銘』は焦山（中国鎮江市）の西麓の岸壁に刻まれた摩崖楷書である。宋代に落雷に遭って長江に崩落した。康熙年間に陳鵬年が残石五つを水中より取り出して一括し、山上に安置した。碑が長江に崩落する前後によって拓本は「水前拓」「水拓」「出水拓」の三種類がある。梁の天藍十三年（514）の刻（黄伯思説）と推定されるが、書者及び刻石年代について確証し得るものはない。書者は唐の顧況（欧陽脩説）、王羲之（黄庭堅説）、陶景弘（黄伯思説）など諸説がある。中西慶爾編『中国書道辞典』（木耳社、1981 年）、井垣清明・石田肇ほか『書の総合事典』（柏書房、2010 年）参照。

19）内藤湖南「書論の変遷について」、昭和 7 年講演、昭和 23 年 1 月および四月発行「東光」第 3 号第 4 号所載、『内藤湖南全集』第 8 巻、筑摩書房、1969 年、63 頁。

がなくても我慢が出来る」という論に賛成しなかった。これは、直接に所蔵者の羅振玉からの話、或いは1913年に博文堂より出版された『明水拓鶴銘』[20]に附された羅振玉の跋文から得られた知見だと考えられる。羅振玉「瘞鶴銘跋」の全文を次の通り引用してみる。

> 瘞鶴銘善本求之海内蔵家、先後垂三十年、不能得。十年前始得見楊大瓢所蔵降岳本、以為海内第一、継又於丹徒劉氏見維楊成民所蔵本、「岳」字亦存上半、与楊大瓢本相頡頏、求再善於此二本者、則不可復見。嗣読虞山邵氏墨縁録、見編中有何蝯叟題楊氏龍石所蔵華陽真逸本鶴銘七言古詩一章為之神欲、顧邵氏但蔵此詩、碑則不知所在、意已夷於南中兵燹矣。去年道州何氏售其所蔵、予託同好之旅滬上者為我求張黒女墓誌、則已為□有力者所得而寄佗古拓数冊至韜緘、甫啓則是銘在焉、為之驚喜如在夢寐、亟以重値得之。噫三十年求之不得、一旦乃復之意外、且為西麓最早所拓、好古如張力臣楊可師所不獲見者、不敢自秘、爰付博文主人精印以示我同好、俾海内三百年来罕見之本、一旦化為千百、其可較之私詣予之篋中者、不更永耶。癸丑五月朔、上虞羅振玉書。[21]

とある。羅振玉は跋文中に目睹した『瘞鶴銘』の善本として楊賓（大瓢）所蔵本と楊成民所蔵本を取り上げ、両者とも水拓本の一つの特徴として「岳」字の上半分が残っていることを指摘した。また、羅氏は三十年にわたって『瘞鶴銘』を求め続けてきて、やっと何子貞蔵本を入手でき、その喜びを隠すことなく表している。同時に、より多くの同好者がその「海内三百年来罕見之本」を鑑賞できるようにするため、羅振玉は秘匿せずに博文堂に刊行出版を依頼した。

五年後の1918年に、羅振玉は『瘞鶴銘』楊賓旧蔵本を入手し、その跋文に

> 「鶴銘」善本伝世最罕。予求之三十年、始得汪退谷旧蔵水拓。「不知其紀」泐少半本、怏然自足、以為不復能得第二本矣。去年遊滬瀆、金君頌清復為予得此本、乃吾郷大瓢山人旧蔵。文後「夆嶽徵君」之「岳」字、諸家考釈、皆僅見「岳」字下半之「山」字、此則上半、朗朗可辨、可正諸家考釈之失、與退谷本各有勝處。不忍自秘、乃影照精印以伝之。戊午二月上虞羅振玉、書于海東寓居之四時嘉至軒。[22]

20）王壮弘『増補校碑随筆』によると、主要な影印本七種類のうち、羅振玉が刊行に携わったのは二種類（『水拓本鶴銘』上虞羅氏珂羅版印。『明水拓本鶴銘』日本博文堂珂羅版印。）があり、いずれも「水拓本」といった貴重な拓本である。王壮弘『増補校碑随筆』、上海書画出版社、1981年、220頁。

21）『明水拓本鶴銘』、油谷博文堂、1913年。関西大学図書館内藤文庫所蔵。当跋文翻刻にご指導を賜りました杉村邦彦先生に深く感謝いたします。

22）『羅雪堂先生全集』六編第十二冊、大通書局、1976年、4971頁。

と述べている。冒頭において世に伝承されてきた『瘞鶴銘』の善本が最も珍しいことを強調している。『瘞鶴銘』の善本とは康熙年間に陳鵬年が石碑を楊子江中から引き上げるまでに椎拓された拓本のことを指す。羅振玉が入手した二つ目の『瘞鶴銘』拓本は思いがけず有名な楊賓の旧蔵であった。楊賓旧蔵本と汪退谷旧蔵本とはそれぞれの「勝処」があるので、精印して広く流伝して欲しいと述べている。

羅振玉が南朝碑の拓本資料の収集を重視したことは、友人の内藤湖南に大きな影響を与えたに違いない。羅振玉が提供した南朝碑の資料に基づいて、湖南は南朝碑研究の意義を阮元、包世臣など清朝碑学研究の大きな流れの中に位置付けている。

図４　羅振玉「瘞鶴銘跋」（1918 年）

（3）墓誌銘の尊重

清朝の書学研究の動向に注目した湖南は、南朝碑のみならず、墓誌銘をも取り上げており、その重要性を以下のように強調している。

> ところが最近に至つて、又一つの発見が支那に於て起つて居るのであります。これがいづれ書論に一種の紀元を画するに違ひないと思つて居ります。まだ不幸にして楊守敬の如き、康有為の如き、その方の議論を纏めて書く人が無いので、その議論が一般に行はれませぬけれども、しかし新しい材料の世の中に出て来ることは夥しいものでありまして、これが必ず書論の変遷を起さずには居らぬと思ひます。それは何かと申しますと、やはり支那に於ける一種の発掘です。そこに私は幾つか列べましたが、それは勿論近年になつて、その方のものが幾らか本にもなつて居ります。羅振玉氏の六朝墓誌菁英といふ本が二三冊出て居ります……[23]

このように、湖南は従来の阮元、包世臣、康有為の碑学論に対して、新出土の墓誌銘が書論

23）内藤湖南「書論の変遷について」、昭和７年講演、昭和 23 年１月および四月発行「東光」第３号第４号所載、『内藤湖南全集』第８巻、筑摩書房、1969 年、69 頁。

の変化を起こし、新紀元を画するだろうと予言した。また、この論の一部の参考資料として羅振玉『六朝墓誌菁英』を取り上げている。『六朝墓誌菁英』の巻頭に付された羅振玉の序文に、

> 墓志之伝世者、莫盛于李唐、雖屠沽走卒、亦有薶銘、致有文不能施句読、書不能具点画者。六朝則不然、非貴胄顯仕、無敢濫用、故伝世至罕、而文字則皆華贍可喜。間嘗都計乾嘉以来諸家所著録者、其数不逾四十、欲会最影印以伝之、以中多佚石、不能備得而止。光宣之間、中州古志出邱壟間者、多魏斉物、予有所聞知、必構（購）求精拓。及辛亥去国、亦必展（輾）転托知好構之、有郵筒往返、経歳始得一紙者、而未嘗以難得隳吾志。比年以来、巾笥所儲、数逾五十。念致之之難也、乃遴選尤精異者十有八品、選工精印、以広其伝……[24]

とある。すなわち六朝の墓誌は、貴族層でなければ濫りに用いることはなかったので、伝承してきたものは非常に珍しく、その文字はいずれも華麗で喜ばしいものである。しかし、乾嘉以来著録されている墓誌は四十に足らず、近年自分は苦労して五十以上を集めたので、精華なもの十八品を厳選し、精印して広く流伝してほしいと述べた。

関西大学図書館内藤文庫に羅振玉編集の『六朝墓誌菁英』が所蔵されており、『六朝墓誌菁

図５　『六朝墓誌菁英』表紙

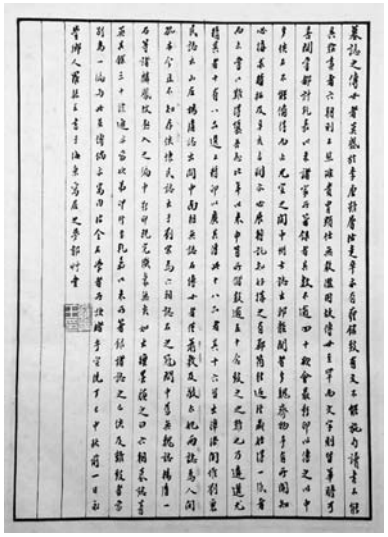

図６　『六朝墓誌菁英』羅振玉序文

24）羅振玉輯『六朝墓誌菁英』（初編、二編）、羅振玉発行、1917 年。関西大学図書館内藤文庫所蔵。

英』所収の「宮第一品張墓誌」に内藤湖南による朱批があり、

> 此銘与傅母王遺女志、宮内太監劉阿素志皆同一手筆、劉阿素志羅君未収。余有精拓本。[25]

と見える。すなわち、「宮第一品張墓誌」が「傅母王遺女志」「宮内太監劉阿素志」と同一人の手筆であることを指摘し、羅氏は後者の「宮内太監劉阿素志」を収録していないが、私はその精拓本を持っていると説明している。これは湖南の羅振玉に対するライバル意識の現れであると言える。

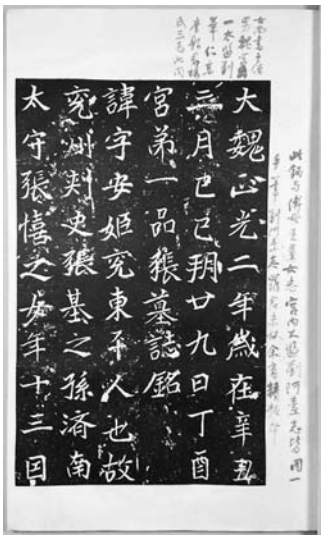

図７　『六朝墓誌菁英』における内藤湖南の朱批

両者の碑学研究について、湖南は羅振玉の金石学関係の著書を読む以外にも、羅振玉から碑学拓本などの資料提供を受けている。湖南は羅振玉が出版した『丁道護啓法寺碑』、『明水拓本鶴銘』、『六朝墓誌菁英』などの碑学資料を活用し、近代中国における書論の変遷に関する論点を構築していったのである。また、阮元、包世臣、康有為の碑学理論に対して評価と批判を加えた上で、「南朝碑」「墓誌銘」などの新しい書学資料の発見により書論も新紀元を画するだろうと予言した。その中で阮、包、康三人の次に、楊守敬と羅振玉を代表的な学者として取り上げている。

4　王羲之研究―「矯枉過正論」と「尊王羲之論」―

本章では、羅振玉と内藤湖南が書いた王羲之法帖（七世の孫である智永を含む）の題跋を中心に、両者の書学観と相互の影響関係について考察する。

(1) 羅振玉による湖南の鑑賞に対する賛同―『大唐三蔵聖教序』に見える両者の跋文―

湖南は北京訪問時に羅振玉のところで『大唐三蔵聖教序』（「集王聖教序」を指す）[26]を目睹

---

25)「宮第一品張墓誌」、『六朝墓誌菁英』所収。羅振玉輯『六朝墓誌菁英』、羅振玉発行、1917年。内藤湖南朱批本は関西大学図書館内藤文庫に所蔵されている。

26)『大唐三蔵聖教序』の内容は、唐の太宗文皇帝が玄奘法師の新訳の経典のために製した大唐三蔵聖教序と、おなじく唐の太宗が玄奘法師の謝表に対して答えた手勅と、そのときの皇太子、のちの唐の高宗の製した述三蔵聖記と、おなじく唐の高宗が玄奘法師の謝表に対して答えた手勅、および玄奘法師の翻訳した般若波羅蜜多心経からなっている。碑文の文字は弘福寺の沙門懐仁が晋の右将軍王羲↗

し、その跋文において字形を比較し、この帖が「喪乱帖」・「孔侍中帖」とは「神理全同」であると指摘した。羅振玉の同意を得た上で、湖南は『大唐三蔵聖教序』を日本に持ち帰り、博文堂から影印出版した。その際、羅振玉は跋文に、

> 歳庚戌、吾友内藤博士来京師、出以相示、一見驚歎、視予之篋蔵十余歳、必竣校以周草窗本而始確信為此宋拓。其鑒賞之敏鈍、相去殆不可道里計矣。博士既叚之帰国、付良工精印、並介予此本於其友上野君、其愛之篤、與博士同、因以帰之、爰識語于冊尾、以存鴻爪。辛亥七月下澣、上虞羅振玉。[27]

と述べている。羅跋から『大唐三蔵聖教序』の出版は内藤湖南が羅振玉とともにはじめて共同企画した王羲之法帖であることが分かり、また両者の跋文からその経緯を確認できる。また羅振玉は「湖南の鑑賞力が敏鋭であり、比べ物にならないほどの違いがある」と賞賛した。

一方、内藤湖南の「上虞羅氏蔵北宋拓聖教序跋」に

> 「聖教」未断本之可貴、而北宋拓本之尤可宝、為此故也。歳庚戌、奉差赴清国北京、獲睹羅叔言学部所蔵北宋拓「聖教序」、墨気黝藹、古香盎然、龍躍虎卧、洞心駭目……因乞叔言付印、以広其伝。叔言慨然見借、乃携帰渡海、属博文堂主鐫入於玻璃版、数月而成。[28]

とある。羅振玉跋文と呼応するように、湖南は北京訪問の経緯を述べ、羅振玉所蔵の『聖教序』を激賞し、博文堂による刊行に至った背景を紹介した。実は、その後「北宋拓聖教序」も湖南がほかの王羲之法帖を評価する際の重要な参考基準となったのである。

↘之の書を集めたるのであるから、世に集王聖教序と呼ばれ、褚遂良が書いた雁塔聖教序などと区別されている。近代以来、日本に伝来した宋拓の聖教序は十数本があるが、明治四十四年（1911）上野氏有竹斎所蔵の本が博文堂から影印されたのがはじめであると言われる。これは羅振玉、内藤湖南、日下部東作の三家の跋がある。中田勇次郎「集王聖教序」、『中田勇次郎著作集』第三巻（二玄社、1984年）、14-28 頁。

27）『大唐三蔵聖教序』、油谷博文堂、1911。関西大学図書館内藤文庫所蔵。

28）『大唐三蔵聖教序』、油谷博文堂、1911。関西大学図書館内藤文庫所蔵。

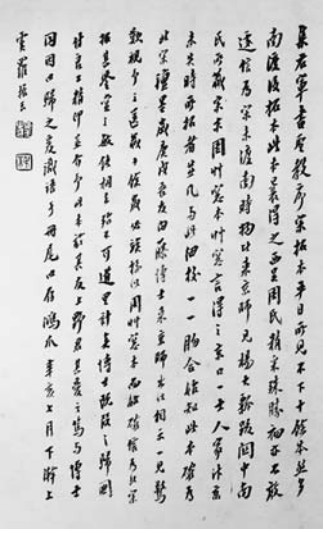

図８　羅振玉「北宋拓聖教序跋」

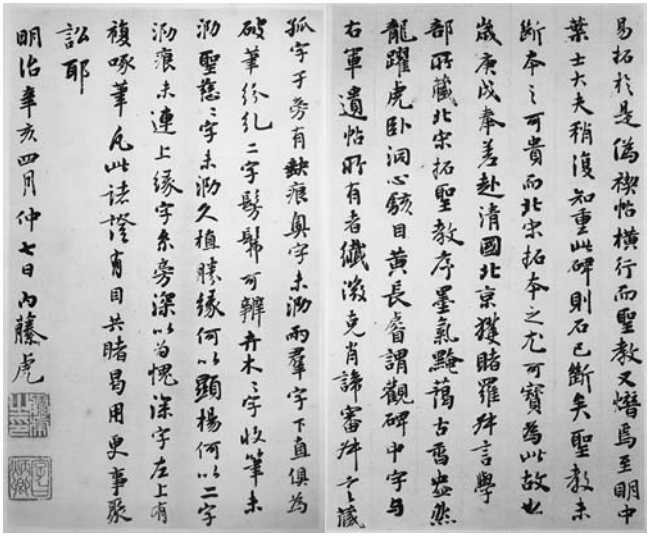

図９　内藤湖南「上虞羅氏蔵北宋拓聖教序跋」（部分）

（2）智永の尊重―『真草千字文』にある両者の跋文を通して―

羅振玉と内藤湖南とはともに小川本の智永『真草千字文』を尊重し推奨していた。羅振玉は『真草千字文』について二通の跋文を書いており、まず『羅雪堂先生全集』所収の「智永千文跋」に

> （前略）後於東友小川簡斎許得、見此本則多力豊筋、神采煥発、非唐以後人所得。仿佛出永師手無疑。昔賢評右軍書勢雄強、永師伝其家法、固應爾爾。此不但可壓倒関中本及顧氏所蔵、且可証宋以来官私法帖右軍諸書伝橅之失。亟写影精印以貽好古之士、即此以求山陰真面庶幾其不遠乎。[29]

とある。羅振玉は友人の小川為次郎（1852～1926）所蔵の『真草千字文』を目睹し、「多力豊筋、神采煥発」と高く評価した。また、王羲之の書勢は雄強であると先賢が評価しており、永師がその家法を引き継いでいることは確かであると述べた。したがって、この『真草千字文』は王羲之の真面目を窺うことができる法帖というのである[30]。この跋文の書写年代は書かれて

29）『羅雪堂先生全集』続編第二冊、文華出版公司、1969 年、442～443 頁。

30）千字文の書風の形成について、杉村邦彦は「千字文は、梁の武帝のときに書の手本として作られたものである。殷鉄石という者が、王羲之の書の中から一千字を集めいて模写し、それを周興嗣がまとめて韻文にしたといわれている。殷鉄石の模本がどんなものであったか明らかでないが、文字の　↗

いないが、おそらく1919年に帰国した後に、中国で影印出版した際に書いたものであろう。

次に、羅振玉が1922年に書いたもう一通の「真草千字文跋」は小川本の智永『真草千字文』の末尾に附されたものである。その跋文に

> 真草千文一卷、為智永禅師真迹、学者于此可上窺山陰堂奥、為人間劇迹。顧或以為與関中石本肥瘦迥殊、而疑之、是猶執人之写照而疑及真面也。近我内府検定書画名迹、中有宋王知微臨智永真草千文。宝沈庵宮保熙為予言豊筋多肉、與此本胸合。異日當写影付印、以與此本並伝示海内、承学之士庶不至執石刻以疑真迹乎。宣統壬戌三月上虞羅振玉書于津沽嘉楽里寓。[31]

図10　羅振玉「真草千文跋」

とある。この「真草千字文跋」の冒頭において、真草千文一卷は智永禅師の真跡であると明言している。また、羅振玉は智永『真草千字文』を王羲之の奥義を伝えるものとして尊重し、書を学ぶ者には、この帖から王羲之の真髄を窺うことができると述べている。

これは決して空世辞ではなく、羅振玉が日本で智永『真草千字文』を目睹した結果、実際にそのように考えたのである。それは内藤湖南の次の証言からも窺える。

> 日本に暫らく来て居つた羅振玉氏など、自分は阮元の云ったやうに、年を取って、あの年になって自分の書風を変化することは難しいと思はれたのでせう、自分にはあれを一寸も習はなかったですけれども、羅振玉さんに大変可愛い孫さんがあり、それが金石の学問を相続してやるといふので、近頃色々孫さんが手伝つて居るですが、その孫さんがその智永の千字文を大変よく習つて居る。さういふ風でこの智永の千字文といふものが大変支那

↘大小、字並び、書風など、かなり統一性を欠いたものだったにちがいない。智永はその模本をもとに、長い年月をかけて雕琢を加え、家法によってそれを統一したものと考えられる」と論じている。杉村邦彦「智永真草千字文」、杉村邦彦『書苑彷徨』（第一集）二玄社、1981年、122頁。

31）小川雅人蔵、石塚晴通・赤尾栄慶編『国宝小川本真草千字文』（勉誠出版、2018年）39頁所収。また石黒豊次発行『国宝真草千字文』（発行所：便利堂、発売元：同朋社、1979年）にも所収されている。

の最近の書風に影響しかけて居るです。[32)]

このように、内藤湖南は講演「書論の変遷について」において、智永『真草千字文』を推奨し、当時の書家文人にも大きな影響を与えていると論じた。例として羅振玉が長孫の羅継祖に智永『真草千字文』を習うように指導している話を紹介した[33)]。1913 年 4 月に大正癸丑京都蘭亭会が開催された際、小川為次郎所蔵の智永『真草千字文』が展示された。湖南は京都蘭亭会の主唱者二十八名の一人であり、実質的な主催者でもあった[34)]。羅振玉も出品者として参加したので、智永『真草千字文』を目睹していた。上記のように羅振玉は帰国後に智永『真草千字文』を中国で刊行しただけでなく、長孫にそれを臨書させていることからも『真草千字文』をいかに尊重していたかが分かる。

一方、内藤湖南は長年の研究を通して、智永『真草千字文』は「喪乱帖」「孔侍中帖」と並ぶ最も重要な古渡りの法帖であるとして跋文や論文でしばしば論じていた。内藤湖南の「永師眞草千字文跋」に

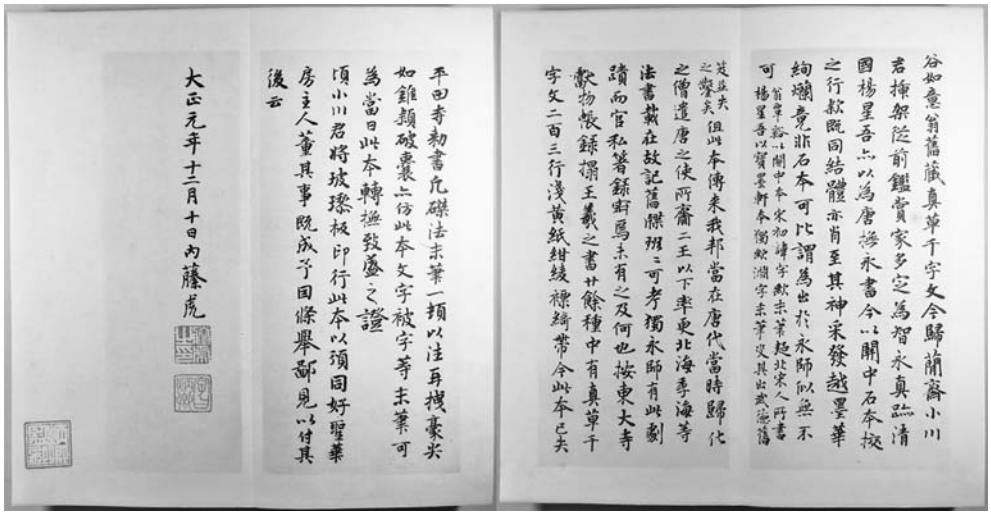

図 11　内藤湖南の「永師眞草千字文跋」（部分）

32）内藤湖南「書論の変遷について」、昭和 7 年講演、昭和 23 年 1 月および四月発行「東光」第 3 号第 4 号所載、『内藤湖南全集』第 8 巻、筑摩書房、1969 年、73 頁。

33）羅継祖書「羅振玉撰宋拓智永真草千文跋」は『書論』第 32 号（書論編集室、2001 年）口絵に掲載しており、その書風が明らかに智永『真草千字文』から出ていることが分かる。

34）杉村邦彦「大正癸丑の蘭亭会とその歴史的意義」、陶徳民編『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承－関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に－』、関西大学出版部、2013 年、266 頁。

谷如意翁旧蔵「真草千字文」、今帰簡斎小川君插架、従前鑑賞家多定為智永真跡、清国楊星吾亦以為唐撫永書、今以関中石本挍之、行款既同、結体亦肖、至其神采発越、墨華絢爛、竟非石本可比、謂為出於永師、似無不可……按『東大寺献物帳』録搨王羲之書廿餘種、中有「真草千字文」二百三行、浅黄紙、紺綾褾綺帯、今此本已失去褾帯、而紙質行款並皆與『献物帳』合。[35]

とある。湖南は『真草千字文』の所蔵先が谷如意（1822～1905）から小川為次郎へ伝承したことを紹介した[36]。この墨跡について、従来の鑑定家の多くは智永の真跡であると鑑定してきたが、楊守敬は唐の搨模本だと推定した。一方で、湖南は関中石刻本[37]を用いて照合し、神采英拔であり、永師から出たと言っても良いと主張するのである。

その上で、湖南はこの『真草千字文』が奈良時代の文献『東大寺献物帳』に記録された「真草千字文二百三行」であると指摘した。特筆すべきは、この意見が羅振玉を含めて後世の学界に対して非常に大きな影響力をもったことである[38]。

(3)「矯枉過正論」と「尊王羲之論」―『唐拓十七帖』にある両者の跋文を通して―

羅振玉は自分の所蔵品『唐拓十七帖』を上野理一に譲った際に、湖南とともに博文堂で影印することを企画した。『唐拓十七帖』は制作当時から完全に揃った状態で流伝した拓本（勅字

35）内藤湖南「永師真草千字文跋」、『湖南文存』巻七、『内藤湖南全集』第十四巻、筑摩書房、1976年、155頁。この跋文は釈智永『真草千字文』（山田茂助発行、1912年）にも所収されている。

36）小川本の智永『真草千字文』の伝来について、幕末明治の文人江馬天江（名は聖欽、江州坂田郡の人、1825～1901）が、旅の僧の病を診療したとき、『真草千字文』が謝礼としてもらったのを、天江の友人の谷鉄臣（如意山人と号し、彦根藩士、1822～1905年）が懇望して譲り受けたと伝えられる（須羽源一氏解説）。その後、小川為次郎の所蔵となり、内藤湖南の「永師眞草千字文跋」がその遁蔵経緯を説明している。中田勇次郎「「真草千字文」解説」、石黒豊次発行『国宝真草千字文』（発行所：便利堂、発売元：同朋社、1979年）に所収。中田勇次郎「智永の真草千字文」、『中田勇次郎著作集』第三巻再録（二玄社、1984年）。

37）関中本千字文は宋の大観己丑（1109）、薛嗣昌が長安において姪の方綱に摸させて石刻したものである。欧陽輔『集古求真』によると、西安碑林本（陝西省博物館）は重刻本である。宇野雪村『法帖事典』上、雄山閣、1984年、262頁。

38）中国の古典文献学家・文物鑑定家啓功氏は1989年に来日した際に、小川家で「真草千字文」を鑑賞した後、原物及び湖南の跋文に対して、「一九一二年日本小川為次郎氏把所得到的一个墨迹本交聖華房影印行世、后有日本内藤虎次郎氏跋尾、从此許多人才見到一个可靠的墨迹本。内藤氏考訂認為這即是『東大寺献物帳』中所謂「搨王羲之書」「真草千字文二百三行」那一卷、所考極其正确」と述べた。啓功「説「千字文」」、『啓功叢稿・論文卷』（中華書局、1999年、252～253頁）参照。

本）であり、七大流伝系統の一つでもある。[39]羅振玉の跋文に

本朝中葉、金石之学大興、士夫争求碑刻、不復措意於法帖。近二十年間、始悟往者矯枉之過正、学者多以重金購古法帖善本、而伝世已日稀。且所謂善本、皆至宋代官私諸帖、当時拓本而止、唐世所摹、則曠世不可遇也。[40]

とある。すなわち本朝（清朝）の半ば頃、金石の学が大いに隆盛し、士大夫らは碑刻拓本を争って求め、法帖に留意しなくなった。しかし、最近二十年間、帖学の過ちを碑学によって正して、かえって度を過ごしていることに気づき、多くの学者は大金を以って古法帖善本を買い求めるようになった。羅振玉は当時清朝において碑学研究は一時ブームになったが、最近では法帖の価値が見直されるという「矯枉過正論（枉がれるを矯めて正すに過ぐるの論）」を述べた。

同じ『唐拓十七帖』の末尾に、内藤湖南が書いた「景印唐拓十七帖跋」が附されている。

余於書法、一意瓣香右軍、雖有阮芸台諸人抑南揚北之論、独余篤信不移、甘為右軍僕役。[41]

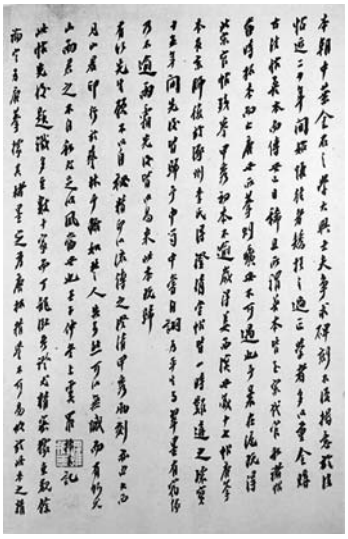

図 12　羅振玉「唐拓十七帖跋」（部分）

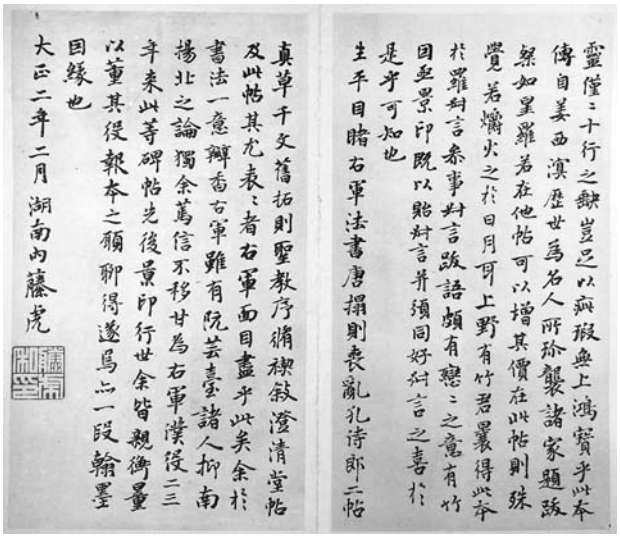

図 13　内藤湖南「景印唐拓十七帖跋」（部分）

39）祁小春『王羲之「十七帖」彙攷』、上海書画出版社、2014 年、233 頁。

40）『唐拓十七帖』油谷博文堂、1913 年。関西大学図書館内藤文庫所蔵。

41）内藤湖南「景印唐拓十七帖跋」、『湖南文存』巻六、『内藤湖南全集』第十四巻、筑摩書房、1976 年、144-145 頁。

↗

すなわち、「余、書法に於ては一意右軍に瓣香す。阮芸台（阮元）諸人に南を抑え北を揚ぐるの論有りと雖も、独り余は篤く信じて移らず、甘んじて右軍の僕役と為らん」と述べている。碑学隆盛の時代において、湖南は羅振玉の「矯枉過正論」に共鳴を受け、それまで日本人が目睹したことのない多くの王羲之法帖を紹介し、宣伝することによって、近代日本における中国書論は碑学一辺倒の傾向に歯止めをかける効果があったと言える。結果的に羅振玉が論じた「枉がれるを矯めて正すに過ぐる」の非を改めることができ、日本の帖学の復興や研究が途切れることなく、今日までその伝統が受け継がれることになったのである[42]。

1899 年に内藤湖南は羅振玉に王羲之の書「喪乱帖」の複製品を贈り、意見の交換をした。実はこの事が内藤湖南による王羲之研究の発端となった[43]。その後、『北宋拓聖教序』『真草千字文』『唐拓十七帖』などの法帖が影印されるたびに、羅振玉と内藤湖南はともに題簽や題跋を書き、それぞれ「矯枉過正論」や「尊王羲之論」などの名篇として残したのである。

5　おわりに

羅振玉と内藤湖南とは長年にわたって書学上の交流があり、学問と芸術の生涯において強い信頼関係を持つ畏友であった。1899 年、羅振玉は湖南と初めて会った時、金石学関係の著書を贈り、湖南はそれに刺激を受けて、金石学と書法史を深く研究する一つの契機となった可能性がある。

それ以来湖南は羅振玉と交流を続け、特に羅振玉の京都寄寓中、両者の交流はさらに密接となった。本稿は、碑学研究と王羲之研究に焦点を絞り、両者の交流過程及び相互の影響関係について考察を加えた。

内藤湖南は羅振玉や王国維などの中国学者の論点や研究を非常に評価しており、書学研究に

↘　この跋文は関西大学図書館内藤文庫所蔵『唐拓十七帖』（油谷博文堂、1913 年）にも所収されている。

42）1880 年に楊守敬が来日して以来、日本における碑学思潮はますます隆盛になってきた。そのような状況に対して、内藤湖南は書法と金石の関係を論じ、古来中国から流伝してきた墨跡と古代日本の金石文字の比較研究を通して、古代の筆法を復興すべきことを主張した。近代日本における碑学と帖学に関する議論は、基本的に清朝の阮元、包世臣、康有為などの代表的な碑学書論家の論点と、伝統的な帖学書論から展開した。その中で、1907 年 6 月不折の「書談二則」から 1911 年 3 月内藤湖南の「北派の書論」までの間に両者が、新興の碑学（六朝書道論）と伝統的な帖学（王羲之論）をめぐって大議論が行われた。石永峰「近代日本における碑帖論争と内藤湖南」、関西大学大学院東アジア文化研究科『東アジア文化交渉研究』13 号、2020 年。

43）石永峰「内藤湖南「王右軍書記跋」考」、『湖南』第 41 号（内藤湖南先生顕彰会編集・発行、2021 年 3 月）に参照されたい。

おいても多大な影響を受けている。裏返して言えば、湖南は積極的に自らの研究を進め、羅振玉への強い対抗意識を持ち、羅振玉に影響を与えることさえあった。例えば、近代における書論の変遷、古渡法帖の『喪乱帖』『孔侍中帖』『真草千字文』などに対する考証は、いずれも湖南の見識と鋭敏な洞察力による研究成果であり、羅振玉と相互に啓発しあい、良い意味でのライバル意識を抱き続けていたのである。

【付記】本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「内藤湖南の東洋芸術論―画論・書論・印学・金石学等領域に対する学問的貢献―」（研究代表者：石永峰、研究課題番号：21K19973）の研究成果の一部である。